

## レビ記10章「異なる火」

### 1A 主からの焼き尽くす火 1-11

1B 主に命じられていない火 1-3

2B 聖所から出られない祭司 4-7

3B 聖俗の区別 8-11

### 2A いけにえの再開 12-20

1B 主への食物 12-15

2B いけにえの中での罪 16-20

## 本文

レビ記 10 章を開いてください。私たちは、祭司たちが任職式を経て、初めのいけにえを献げる奉仕にあずかったところを 9 章で読みました。そこで、主がそのいけにえを火をもって焼き尽くす光景を民が見て、主をほめたたえ、ひれ伏す場面を読みました。「9:23-24 モーセとアロンは会見の天幕に入り、そこから出て来て民を祝福した。すると【主】の栄光が民全体に現れ、火が【主】の前から出て来て、祭壇の上の全焼のささげ物と脂肪を焼き尽くした。民はみな、これを見て喜び叫び、ひれ伏した。」すばらしいひと時です。私たちも、主の栄光が礼拝の時に表れて、喜び叫び、ひれ伏す時がありますね。

### 1A 主からの焼き尽くす火 1-11

ところが、その主の栄光の現れる高嶺の時に、突如として悲劇が訪れます。

### 1B 主に命じられていない火 1-3

<sup>1</sup> さて、アロンの子ナダブとアビフはそれぞれ自分の火皿を取り、中に火を入れ、上に香を盛って、主が彼らに命じたものではない異なる火を主の前に献げた。<sup>2</sup> すると火が主の前から出て来て、彼らを焼き尽くした。それで彼らは主の前で死んだ。<sup>3</sup> モーセはアロンに言った。「主がお告げになったことはこうだ。『わたしに近くある者たちによって、わたしは自分が聖であることを示し、民全体に向けて わたしは自分の栄光を現す。』」アロンは黙っていた。

大祭司アロンの息子ナダブとアビフが、主から出た火によって焼き尽くされてしまいました。いけにえを主からの火が焼き尽くしたように、彼らを焼き尽くしたのです。喜び叫び、ひれ伏すという、光栄に満ちたその頂点にある時に人々が倒れてしまいました。

これは、旧約の時代だけの話ではないことを私たちは思い出します。使徒の働きで、聖霊が人々に下り、それで彼らは自分たちの所有のものを売り払って、それを使徒たちのところに持って

来ました。だれも自分ものを自分のものだとは主張しない、愛の共同体が生まれたのです。ところが、その最中に、偽善の罪を犯した夫婦がいました。アナニアとサツピラです。代金の一部を自分のところにとっておいたのに、それが全ての代金であると偽りました。それで、聖霊に対して欺いた罪で、二人はその場で倒れて死んでしまいました。

この夫婦にあった問題も、アロンの息子の問題も共通の問題があります。3 節を見てください。「わたしは自分が聖であることを示し」というところです。主ご自身の近くにいる者たちによって、主はご自身が聖であることを示したいと願われています。そして、ご自分の栄光を現したいと願われています。そこに、主から来た火ではない、自分自身の火を息子が持ってきたからです。神の栄光の現れているところに、自分の栄光を持ち込んだのです。主は聖なる方、つまりすべての被造物から別たれた方であることを示したいですから、ご自身の働きに私たち、神に仕えている者たちのしていることを混ぜ合わせるのを、非常に嫌います。主は、ご自身の近くにいる者たちがご自身の命令に従順になることによって、ご自身のみが働いて、ご自身の恵みを示したいのです。

パウロはテモテに対して、こう教えました。「I テモ 2:4-5 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。」主は、すべての人が救われるために、イエス・キリストという真理を知らせたいと願われています。主に仕えている者たちによって、イエスがどのような方かを知らせたいと願われています。ですから、自分が人の前に立つ時に、確かに主を現しているのかを確かめないとはいけません。それができず、人の前にいる時に、主のしもべであるはずのものが、自分自身を現しているのであれば、ここのアロンの息子と同じような過ちを犯しているのです。

モーセ自身が後に、過ちを犯しました。民が荒野の旅で不平を鳴らしていた時に、モーセは民の前で怒って、岩を杖で二度、打ちました。それで主は、「民数 20:12 あなたがたはわたしを信頼せず、イスラエルの子らの見ている前でわたしが聖であることを現さなかった。」それで、モーセとアロンは、約束の地に入ることが出来なくなりました。主は民に対して怒っていなかったのに、忍耐深かったのに、忍耐が切れて怒り散らしたのです。主を現さず、自分自身を現してしまいました。

なぜ、アロンの息子が、そのような過ちを犯したのか、じっくり見てみたいと思います。最も大きく、目立つことは、「主が彼らに命じたものではない異なる火」ということです。これまで、出エジプト記においても、レビ記においても、モーセについて、アロンについて、「主が命じられたことを行った」という言葉が、ずっと繰り返されていました。主がこうしなさいと命じられていることを、そのまま行っていったのです。「8:36 アロンとその子らは、主がモーセを通して命じられたことをすべて行った。」とあります。そこでいきなり、主が命じられていない火を主の前に献げたとあるのです。火であればそれでいいのではなく、主から命じられているかどうかすべてであります。

預言者サムエルが、王サウルがいけにえを献げたことについて、こう言いましたね。「Ⅰサム 15:22-23【主】は、全焼のささげ物やいけにえを、【主】の御声に聞き従うことほどに喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。従わないことは占いの罪、高慢は偶像礼拝の悪。あなたが【主】のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた。」たとえ、同じことをしていても、ここでは火を献げるということをしていても、主の命じられたことでないのであれば、それは主ご自身の聖なることを現していないのです。

私たちのキリスト者としての歩みは、とても単純です。主に、その日に言われたことを行っていくことだけです。一日の労苦は一日にして足れりと主は言われましたが、その日に主に語られたことを聞いて、それを行うということです。それ以上のことを、主のわざを自分の肉の力で成し遂げようとする時に、アロンの息子と同じ過ちを犯します。

そして次に、「それぞれ自分の火皿を取り、中に火を入れ、上に香を盛って」とあります。ここの事件を戒めとして、レビ記 16 章には、大祭司に対する主の教えが書かれています。12 節にこうあります。「彼は主の前の祭壇から炭火を火皿いっぱい、また、粉にした高い香を両手いっぱいに取り、垂れ幕の内側に持って入る。」青銅の祭壇では、主の食物となるいけにえが焼かれています。その、主に対する火を取って、その炭火を火皿に入れて至聖所に入ります。それをアロンの息子たちは、やっていなかった可能性があります。その人は異なる火を献げたと思われます。

私たちは、今の自分の情熱や熱心が、主ご自身から出たものなのか、それとも自分自身から出たものなのかを吟味する必要があります。パウロは、主が終わりの日に、自分の働きが主の火によって試されることを話しています。「Ⅰコリ 3:12-13 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。」主が言われたように、例えば、人に見られるためにしたことは、すでに報いを受けています。天において報いはありません。どんなに熱心に見えても、キリスト者らしくふるまっていたとしても、心が違うところを向いていたら、主の火によって燃やされてしまいます。私たちが唯一、主に受けられる心の動機は、キリストの愛です。「Ⅱコリ 5:14 というのは、キリストの愛が私たちを捕えているからです。」キリストの愛に触れられて、それでキリストを愛する愛は、主から出た火です。

そしてレビ記 16 章には、この二人が大祭司アロンが年に一度、決められたいけにえを献げ、血を携えることによってのみ入ることができる至聖所の中に入ろうとしたように思われます。それは、キリストがただ一度、ご自身を献げ、血を流されて、聖所をきよめて、永遠の救いを成し遂げたことを意味します。16 章に入った時に詳しく学んでいきますが、横柄にも自分で自分の救いを成し遂げると考えるのであれば、たちまち主から出る火によって焼かれてしまうのです。パウロは、ガラテヤの人たちに、このように叱責しました。「ガラ 5:4 律法によって義と認められようとしているなら、

あなたがたはキリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。」

このように、同じ火であっても、異なる火になっていないかどうか、私たちは心を注意深く見張る必要があるということです。

#### 2B 聖所から出られない祭司 4-7

<sup>4</sup> モーセはアロンのおじウジエルの子、ミシャエルとエルツァファンを呼び寄せ、彼らに言った。「近づいて行って、あなたがたの身内の者たちを、聖所の前から宿営の外に運び出さない。」<sup>5</sup> 彼らはモーセが告げたとおり、近づいて行き、長服をつかんで彼らを宿営の外に運び出した。

アロンの子ナダブとアビフが聖所の前で倒れています。それを彼らの従兄弟に当たる、「ミシャエルとエルツァファン」に宿営の外に引きずり出させています。死体は汚れたものとみなされており、かつ、アロンの親戚は二人の死を悼まないといけません。しかし、父のアロンと兄弟息子の残る二人は、出て行ってはいけません。

<sup>6</sup> モーセは、アロンとその子エルアザルとイタマルに言った。「あなたがたは髪の毛を乱してはならない。また衣を引き裂いてはならない。あなたがたが死ぬことのないように、また御怒りが全会衆に下らないようにするためである。しかし、あなたがたの身内の者、すなわちイスラエルの全家族は、主が焼き殺した者のことを泣き悲しまなければならない。<sup>7</sup> また、あなたがたは会見の天幕の入り口から外へ出てはならない。あなたがたが死ぬことのないようにするためである。あなたがたの上には主の注ぎの油があるからだ。」それで彼らはモーセのことばどおりにした。

レビ記 21 章に書いてありますが、大祭司に対して、他のイスラエル人と比べて、かなり高い基準が設けられていることがわかります。家族が死んでも、それで哀しみを表に出してはならず、何よりも、聖所から外に出てはいけないのです。「21:10-12 兄弟たちのうち大祭司で、頭に注ぎの油が注がれ、任職されて装束を着けている者は、その髪の毛を乱したり、その装束を引き裂いたりしてはならない。いかなる死人のところにも入って行ってはならない。自分の父のためにも母のためにも自分の身を汚してはならない。聖所から出て行って神の聖所を冒してはならない。神の注ぎの油による記章を身に着けているからである。わたしは【主】である。」

死者のために哀しみを示すことも、また遺体を埋葬することも、罪であるどころか、家族は当然ながら行わないといけないものです。しかし、主の近くで仕えていて、主の聖なることを表すために召された者として、アロンとその息子たちは聖所の外に出てはならないのです。主に仕えている時に、こういうことは起こります。

例えば教会の牧者は、自分の身内に不幸なことが起こったり、病気になった人がいても、教会

の礼拝を取り次いでいけなないといけなないことがあります。私の場合は、幸い、両親は健在です。しかし、両親は信仰者であり、病気を持っているのにも関わらず、息子が教会を牧会していることを知っているのです。信仰によって自分たちで生活することに全力を尽くしています。これを当たり前だと思っては決していけません。けれども、主が聖なることを示さないといけなない時に、必要を満たしてください。これは、牧者に限らず、みなさんが主にお仕えしている中で、任されていることがあるならば、それに忠実になる時に、そこに主の聖さが示されます。

### 3B 聖俗の区別 8-11

<sup>8</sup> 主はアロンにこう告げられた。<sup>9</sup>「会見の天幕に入るときには、あなたも、あなたとともにいる息子たちも、ぶどう酒や強い酒を飲んでほならない。あなたがたが死ぬことのないようにするためである。これはあなたがたが代々守るべき永遠の掟である。

アロンの息子ナダブとアビフが、なぜ異なる火を献げたのか、もう一つの原因を主が示しておられます。それは、ぶどう酒や強い酒を飲んでいて、判断力が鈍ったためです。パウロは、「エペ 5:18 ぶどう酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。」と教えました。五旬節の時に弟子たちが聖霊に満たされて、異言を語っていた時に、ユダヤ人たちの中で、ぶどう酒によっているのだと言っている人がいました。御霊に満たされる時と、ぶどう酒に酔っている時に共通している部分があるから、そのようなあざけりができました。それは、聖霊によっても、酒によっても、自分ではない他の何かに支配されることです。自分の力ではないところで思いが与えられます。しかし、その実は正反対です。御霊に満たされれば、そこには愛、喜び、平安、善意、親切、自制などがあります。酒に酔えば、放蕩があります。良い悪いの判断力が鈍ります。他のあらゆる肉の行いをしてしまいます。愚かさに走ります。

主に仕えている時に、私たちはむしろ、そういった違う刺激物に頼ってしまう誘惑があるかもしれません。孤独を味わいます。裏切りを味わいます。罪による反抗も味わいます。そうした時に、これら、御霊ではない違う刺激物を求めてしまうかもしれません。しかし、御霊に満たされるのです。私たちは、主に仕えるだけでなく、主の恵みに浴して、楽しむ必要があります。

<sup>10</sup> こうしてあなたがたは、聖なるものと俗なるもの、また汚れたものときよいものとを分け、<sup>11</sup> また、主がモーセを通してイスラエルの子らに告げたすべての掟を、彼らに教えるのである。」

ぶどう酒によって判断力が鈍った問題があるので、主は、これから聖と俗、また汚れと清さについての区別を教えて行かれます。16章に入って、いけにえを献げる教えに戻りますが、11章から15章までに、これら清いもの、汚れたものの区別について話していきます。話が迂回していますが、しかし、ことごとく霊的な清さと汚れについて教える、貴重な教えを主が下さっています。

## 2A いけにえの再開 12-20

### 1B 主への食物 12-15

<sup>12</sup> モーセは、アロンと、残っている彼の息子、エルアザルとイタマルに言った。「主への食物のささげ物のうちから穀物のささげ物の残りを取り、種なしパンとして祭壇のそばで食べなさい。それは最も聖なるものだからである。<sup>13</sup> それを聖なる所で食べなさい。それは、主への食物のささげ物のうちから、あなたが受ける割り当てであり、あなたの子らの割り当てである。そのように私は命じられている。

主は、アロンと息子二人、エルアザルとイタマルに、すぐに祭司の務めを果たすように命じておられます。私たちがすでに学んできたように、祭司の務めの大きなものの一つに、穀物のささげ物を食べるというものがありました。私たちは、キリストの砕かれたからだを覚える、聖餐式がまさに、それに当たります。キリストのからだを覚えるためにパンを食べ、その流された血を覚えるために、ぶどう酒の杯を飲みます。彼らは食べることで、主の聖なるものに気づかっているのです。そして、私たちも、聖餐式において食べることによって、キリストに気づかれます。

<sup>14</sup> しかし奉獻物の胸肉と奉納物のもも肉は、あなたと、あなたとともにいるあなたの息子、娘たちが、きよい所で食べることが許される。それは、イスラエルの子らの交わりのいけにえから、あなたへの割り当て、またあなたの子らへの割り当てとして与えられている。<sup>15</sup> 奉納物のもも肉と奉獻物の胸肉は、食物のささげ物としての脂肪に添えて持って来て、奉獻物として主の前で揺り動かさなければならぬ。これは主が命じられたとおり、あなたと、あなたとともにいるあなたの子らが永遠に受ける割り当てである。」

交わりのいけにえには、脂肪は祭壇の上で焼きます。けれども、胸肉の部分ともも肉は、ここに書いてある通り、祭司の家族に与えます。これは生活費をまかなうような役目があります。主から与えられているものを、主に仕えている者たちの間で分け与えることによって、その恵みを味わいます。そこで、胸肉は奉獻物であり、もも肉は奉納物とあります。一方は横に揺り動かし、もう一方、奉納物は上下に動かします。上下に揺り動かすのは、主に対するものであり、横に揺り動かすのは、互いに対して仕えていることを示しています。

### 2B いけにえの中での罪 16-20

<sup>16</sup> モーセは罪のきよめのささげ物の雄やぎを懸命に捜した。しかし、なんと、それは焼かれてしまっていた。モーセは、アロンの子で残っているエルアザルとイタマルに怒って言った。<sup>17</sup>「どうして、あなたがたは、その罪のきよめのささげ物を聖なる所で食べなかったのか。それは最も聖なるものだ。それは、会衆の咎を負い、主の前で彼らのために宥めを行うために、あなたがたに与えられたのだ。<sup>18</sup> 見よ、その血は聖所の中に携え入れられなかった。あなたがたは、私が命じたように、それを聖所で食べるべきだったのだ。」

罪のきよめのためのいけにえですが、雄やぎが選ばれていますが、族長の一人が罪を犯したのでしょうか。4章に、族長が罪を誤って犯したら、雄やぎを持ってくるように命じられています。そして、イスラエルの子らが携える、罪のきよめのためのいけにえも、食べるように命じられています(7:26)。ところが、それが焼かれてしまったのです。それで、モーセは怒っているのです。

<sup>19</sup> アロンはモーセに言った。「見なさい。今日、彼らは自分たちの罪のきよめのささげ物と全焼のささげ物を主の前に献げたが、このようなことが私の身に降りかかったのだ。今日、私が罪のきよめのささげ物を食べていたら、そのことは主の目に良しとされただろうか。」<sup>20</sup> モーセはこれを聞き、それでよいとした。

アロンは、自分の息子たちがモーセに咎められているのを見て、モーセに反論しました。二人の死んだ息子、兄たちが火に焼かれて死にました。それが、自分たちの罪のきよめのためのささげ物と全焼のささげ物を献げている時に、異なる火を献げるという事件が起こりました。そのいけにえを献げるところでの罪なので、続けてそのいけにえを献げても、良いのだろうか？という疑問と、罪に対する悲しみです。これは、例えば、みことばを取り次いでいる時に、何らかの形で言葉による罪を犯したのであれば、みことばを解き明かすことは大事ですが、その傷について、悲しみの時を経なければ、みこころに合わないのではないか？と思うことは当然です。

このようにして、主に仕える時にある、独特に過ちについて見ました。「異なる火」であります。主の与えられた火によって生きているようで、いつの間にか逸れて行って、自分自身から出てくる火を主に献げることがあります。自分の寂しさかもしれない、うぬぼれかもしれない、人々に認められたいという思いかもしれない。利得の手段とする貪りさえあります。主の恵みと愛に触れられて、それで主に仕えるという純粋な思いがあつてこそ、主に命じられたところに留まるという満たしは与えられません。